佛教大学　文学部論集　第96号（2012年3月）

王小鷹の文革期創作活動への一考察

瀬　邊　啓　子

〔抄　録〕

文革期に知青文学がどのような過程で創作され、発表されるにいたったのか。この点を王小鷹の文革期の創作活動を通して、分析・考察を行った。

王小鷹の処女作である「小牛」の創作･発表の背景から浮かび上がってくることは、知青文学については書き手が知青であり、一定の水準の作品が書けさえすれば、「誰でもよかった」ということである。そのため作品を書く知青の出身階級については、全く問題にされていなかったことが分かった。王小鷹は作家になりたいとも思っていなかったのだが、たまたま仲間たちと業余文藝小分隊を作り脚本などを書いていたために、編集者から原稿依頼を受けることになった。

そうして文革期の文藝政策の変化に左右されながらも、編集者とともに何度も改稿を繰り返し､「小牛」については最終的には編集者が強引に審査を通す形ではあったが、作品発表にいたり、作家としての一歩を踏み出したのである。

キーワード　王小鷹、文革、知青、知青文学

1．はじめに

プロレタリア文化大革命（以下、文革）時期において、文藝作品を公的に発表・出版できた作家はどのような条件のもと発表・出版が可能であったのか。この点について、知識青年（以下、知青）であった張抗抗を取り上げ、彼女の証言に基づき「文革期における張抗抗の創作活動」(2011）のなかで分析を行った。

その際、張抗抗の出身家庭が決して“紅五類”と呼ばれるような階級ではなく、父親の歴史問題に始まる、さまざまな問題を抱えていたことが判明した。それにも関わらず、張抗抗は長編小説『分界線』（上海人民出版社、1975）を発表することができたのである。つまり文革中に作品を発表できた作家が必ずしも労農家庭出身であることが求められたわけではなく、作家としての力量が認められ、かつ当時の政治状況・政策に則した作品であれば、作品発表の機会

が得られたのである。

もちろん張抗抗が「知青」である以上、“上山下郷”運動の革命的精神を唄うにふさわしい条件を備えていたとは言える。また“上山下郷”運動を称揚するために、知青たちの手による文藝作品も多く出版されている。ではそういった作品群はどのような過程を経て、発表・出版されるにいたったのだろうか。

本論では文革期における知青文学のあり様を、王小鷹の文革期の創作と作品発表の契機を通して考察してゆく。

2. 王小鷹と「小牛」

王小鷹は1974年に出版された知青文学を集めた『農場的春天』（上海人民出版社）に「小牛」が掲載されたことで、文壇デビューを果たした。『農場的春天』は「上海市属国営農場三結合創作組」を著者名に冠しているように、新海農場や前哨農場，黄山茶林場などで働く青年たちが描いた作品を集めた小説集である。

『農場的春天』の出版説明によると、この本は「農村版図書」として全国出版された。また“上山下郷”に参加している知識青年を主要な読者ターゲットにしつつも、農村の基層幹部や中学・小学校の教師，貧下中農にも提供できるように考えられている。その内容としては政治的な読物であるだけではなく、文学藝術的な読物であるといった性質を求められ、さらには教科書的な読物になるよう編まれたものである。

そのなかの一篇として収録されたのが、王小鷹と金稼仿の共著である「小牛」である。「小牛」は私（楊小敏）を語り手にした一人称体の小説で、「私」が憧れであった雲嶺茶場采雲山突撃排に行き、仲間たちと「革命」を推進する様を描いた小品である。

この作品には、金華姉さんという主人公の憧れの人物が登場する。金華は雲嶺茶場の山地開拓の際に命を落とすのだが、このエピソードは王小鷹がいた黄山地区で11名の若者が1969年7月5日に山津波で犠牲になったことに拠ったと思われる。またこの11名の若者については、王小鷹はのちに『黄山十一小英雄』（陸堅と共著、少年児童出版社、1978）という作品を発表しており、彼女にとっても印象深い事故であったと言える。

「小牛」というタイトルは、この金華姉さんの弟金堯東の綽名から付けられている。その綽名は金華が使っていたという鋤に“做一輩子革命的牛！〔一生革命の牛となる〕”（『農場的春天』p.195）と赤い文字で刻まれていたことから、その鋤を受け継いだ堯東の綽名となった。つまり革命に身を捧げる「牛」とならんとしたことが美談となっているのである。

ここで「小牛」について、以下に簡単に内容を見ておく。金堯東が「私」たちに姉の自慢話———天安門で毛主席を見たことがある、をしていたことで、金華は「私」たちの憧れの人物となっていた。その金華の死を受けて、金堯東は自慢の姉の仕事を引き継ぐため、学校を卒業

する前に雲嶺茶場へ赴くことにした。「私」たちは金堯東が出発する日、駅まで見送りに行った。そのとき、自分たちも卒業したら雲嶺茶場へ行きたいという希望を申し出るのであった。

その後、「私」は憧れだった采雲山に行くように命じられる。あまりの喜びから、小牛排長が迎えに来ると聴いてはいたものの、迎えの人物がいないと見るや、「私」は一人で出発してしまう。采雲山へ向かう途中、呼び止められるのだが、呼び止めたのはなんと金堯東だった。二人は再会を喜び合い、そこで堯東が「小牛排長」であることを知るのである。そこに眼鏡をかけた技術員の姜仕儒が追いかけて来て、堯東に茶の苗を返すよう言うのであった。

堯東は姉の意志を継いで、毛主席の「実践論」に習って、姉が望んでいた杜鵑塢の開発を試みようとしていた。姜仕儒たちはすでにその山の開発は失敗に終わったと見ていたため、茶の苗をビニールハウス栽培で使用しようとしていた。しかし堯東は党書記老陳や仲間たちの支持のもと、杜鵑塢に茶の苗を植えようとしていたのである。

茶の苗を植えたとき、堯東は排水溝の必要性を感じた。そんな折、大雨の予報が放送され、堯東たちは排水溝を掘るために杜鵑塢へ向かうのであった。雨のなか排水溝を掘っていると、巨石が作業の妨げとなった。みなが議論をするなか、堯東が指示を出し、みなで行動を起こす。しかし姜仕儒は危険だから撤退するように提案し、また仲間の一人である楊軍でさえ一時的な避難を促した。しかし堯東は毛主席のため、プロレタリアのため頑張っていることや、先人たちを引き継いで、革命の大黒柱を立てていることなどを語り、その言葉に「私」は胸を打たれるのだった。

結局、撤退を促した楊軍も加わり、全員で力を合わせて巨石を取り除く。その際、その巨石が茶の苗木のほうへ転がって行きそうになったのだが、堯東が石を押さえつけ、茶の苗を自ら守ったのである。その状況を見て、「私」も心が熱くなった。そしてみなで力を合わせて、石を谷のほうへ転がし、排水溝は完成するのだった。

雨がやみ、風もやんだ。そして采雲山山頂に虹がかかった。そのとき「私」は堯東から采雲山の未来像を聴かされるのだった。そして「私」は上海にいる仲間たちに手紙を書き、この山に根を下ろして一生を革命に捧げる決心を語るのである。

この作品の読後感は爽やかな印象を受けるが、作品そのものは文革期の知青文学のなかにあっては、ありふれた作品と言える。文革期の知青文学によく見られるのは、合理的あるいは経済的とは言えない開拓を「革命」と位置づけ、周囲の反対あるいは妨害を受けながらも推進し、そして成功を収めるという構成で、「小牛」もまさに同種の小説と言える。また堯東という革命（開拓）のためには、どんな困難にも立ち向かい、仲間たちに刺激を与え、けん引してゆくという人物像は、まさに「三突出」で求められた英雄像の１つと言える。

「小牛」では出身が地主階級という悪役の典型人物こそ描かれていないが、姜仕儒という日和見で、利己的な人物が登場している。姜仕儒は孔副場長に従って、ビニールハウス栽培を積極的に行おうとしていたかと思えば、堯東が杜鵑塢に茶の苗木を植えてしまったあとは、高山

の寒冷地での茶栽培についてレポートや論文を書けば、大学進学の道が開けるかもしれないと考え、堯東たちを手伝おうとする。しかし最後は雨のなか排水溝を掘る作業の最中に逃げて、山から下りてしまう。このような行動から、堯東の仲間である小辣子には『大字報』で姜仕儒の問題を取り上げるべきだと提案され、堯東もそれに同調するのである。

しかし冷静に見てみると、姜仕儒は科学的な根拠をもとに杜鵑塢での茶栽培に反対しており、その意見は至極まっとうなものと言える。科学的な見地では寒冷地での茶の栽培は難しいという判断のなか、人命を賭してまで無理な開拓を行おうとするのは無謀としか言えない。しかし文革期には、それを「革命」と位置づけ、そのような革命を行うことを推奨・称揚する作品が求められていた。そしてこれらの作品を通して、“上山下郷”運動に参加することが革命的なことであり、「小牛」の語り手である「私」のように農村部や山地に腰を据えて暮らし、一生を革命に捧げるということを人々に求めているのである。

それでは王小鷹はどのような経緯から、「小牛」を執筆することになったのであろうか。

3．作家・王小鷹の誕生

王小鷹「処女作」(『可憐無数山』吉林人民出版社、1998）によると、王小鷹自身は作家になろうと思っていたわけではなかった。この点は張抗抗とは大きく異なっている。ただし文学的な素養がなかったというわけではなく、余暇で“業余文藝小分隊”というグループを自ら作ってはいた。このグループは王小鷹たち向明中学出身者たちによって提案されたもので、1966年に高校を卒業したメンバーが黄山茶林場には10名いた。その内6名が采雲隊で、学生時代から文藝活動に積極的であった。「可憐無数山」(『可憐無数山』p.8）には、そのメンバーとして高培雄と呂縄雲の名が挙げられている。

このとき、父親[1]が詩作を行っていたこともあり、王小鷹はこのグループの編・作者となった。だが創作経験がなかったため、替え歌から“対口詞〔二人の役者が、韻を踏みながら、一問一答形式で演ずる新式の演芸〕”や“快板〔謡いでは韻を踏み、語りでは竹板を打って速いリズムを取る、一種の演芸〕”を創っていた。陸華という連隊副指導員が業余文藝小分隊を支持してくれたことで、四連業余文藝小分隊は黄山茶林場で有名になり、その後は場部組織の文藝小分隊となった。陸華はのちに山津波で犠牲になった11名のうちの一人である。

このグループでは自作自演で“快板”やミニ歌劇，一幕劇などの話劇などを行っていた。演目には「采茶舞」,「茶林女炮手」,「采茶日記」といったものがあり、「采茶日記」を場部ホールで行った時は、通路にまで人が溢れるほどの満員だったという[2]。それほどまでに知青たちは娯楽に飢えていたのである。

1969年[3]王小鷹の生産隊にいた11名の命が洪水で失われた。このことから、彼らの事跡を歌舞劇「激流紅心」として公演を行った。「激流紅心」については、「可憐無数山」(前掲）の附

録として紹介されている。内容は、7月5日の明け方からの山津波の情景と11名の犠牲者たちの奮闘を実名で描き、今日の黄山茶林場があるのは彼らの尊い犠牲の上にあることを唄った作品となっている。この「激流紅心」という歌舞劇の公演から、市農場局から上海へ行くよう命じられ、“全市職工”の“業余匯演〔アマチュア演芸会〕”に参加したこともあった。王の「処女作」によると、このグループにはプログラム2本の手抄本があったという。

この公演の5年後に、林場部党委員会副書記が原稿依頼に来ていた上海人民出版社の編集者老郭に「ものを書くのが上手い」(4)として、王小鷹を推薦した。老郭は王小鷹に農場の青年たち自身の手による青年たちの生活を描いた本を創る準備をしていると説明し、王小鷹に黄山茶林場の青年たちの生活を反映させた作品を書くよう依頼をする(5)。このとき王小鷹は依頼を固辞し、代わりに金稼仿を推薦した。王小鷹は金稼仿を「絵が描けて、さらに古体詩も書け、聴いたところでは、小説も書いたことがあるそうだ」(6)と紹介したが、老郭はどちらか一人でも共作でもよいので一作書くように促す。ここから浮かび上がるのは、「誰でもよい」ということである。

結局、王小鷹は作品を書くことに決め、金稼仿と作品の相談をする。その結果、王小鷹が初稿を書き、金稼仿が手直しをするという手順が決められる。王小鷹の行動は素早く、話し合いを持ったその日の夜には蝋燭を借りて、4,000字程度の作品を書き上げた。それはおよそ小説とは言えず、記述式の散文にすぎなかったという(7)。その文章に金が手を加え、8,000字余りの作品に仕上げたのである。王によると、金は人物を書き足し、筋書きにも手を加えるなど、大幅に手を加えたという(8)。その作品を見た老郭は、作品完成の早さに驚き、また「生活の息吹もあり、偽りのない気持ちもある」(9)として、王に対しては小説を書ける人物と評価を下し、原稿を持ち帰ったのである。

ここで王小鷹と共作をすることになった金稼仿について見ておくと、王小鷹は金稼仿については絵がうまいということや、古体詩が書けるといった面以外については、言及していない。また作家として金稼仿という名前は出て来ない。おそらく連環画家として知られている人物ではないかと思われるが、この人物が“上山下郷”に行った経験があるかどうかは定かではない。百度百科によると、連環画家の金稼仿は1949年上海に生まれ、華東師範大学藝術教育系を卒業している。1976年より連環画の創作出版を始め、現在は上海百草画院副秘書長をしているという(10)。上海人であることや、連環画を描いていることから、王小鷹の説明にも当てはまり、また王小鷹が1947年生まれであることからも世代的にも近い。これらのことを鑑みると、「小牛」の共作者は連環画家の金稼仿と見てよいだろう。また金稼仿は「上海市老年画会」の副秘書長として名前が挙がっており、同会の副会長および理事・常務理事の名に王小鷹が挙がっていることから、現在も顔を合わせる間柄にあるようである。

さて作品を持ち帰った老郭ではあるが、半年経っても何の音沙汰もなかった。このころになると王小鷹は作品が審査に通らなかったという可能性を考え、その一方で“探親〔帰省〕”の

時期が近付くにつれ、上海に帰りたいという気持ちが強くなっていった。つまり原稿を気にする余裕がなくなっていたのである。ところが上海に帰省するや、老郭が家まで訪ねてきた。そして「原稿はやはり使おうと思っている。ただ手直しをしなくてはならないので、編集部まで来てください。一緒に相談しましょう」(11)と言われるのである。そこで編集部に行ってみると、多くの農場で働く青年たちがやって来ていたのである。

ここから知青文学として、「使える」作品を求めている状況が窺える。つまり大量に作品を集め、そのなかから編集部の意向に合った作品を手直しして、知青文学として世に出そうというのである。すでに上述したが、これは作品さえよければ、誰の作品でもよいということであり、「誰が書いたか」ということは問われていないことを示している。

老郭の説明では、王小鷹たちの原稿は最終審査を通らなかったという。その理由は「階級闘争の観念に欠ける」(12)というものであった。しかし編集者である老郭は「生活の息吹」にこだわりを見せたということから、張抗抗『分界線』出版過程の編集者の役割を思い起こさせる。それは張抗抗自身が指摘した、編集者自身の「三突出」に対する考え方の違いが作品内容に影響を与えるというもので、それにより『分界線』は「それほど極端なイデオロギーを反映した作品にはならなかった」(13)のである。つまり王小鷹たちの「小牛」も老郭のこだわりの影響を少なからず受けたと考えるのが順当で、「小牛」の読後感や作中の描写はこの老郭の影響によるものとも言える。

結局、王小鷹は帰省休暇中ずっと家で原稿の手直しをする羽目になる。しかし修正稿も審査を通らなかった。それは「階級の敵がまだ陰険さが足りない」、「階級の根源がまだしっかりと掘り下げられていない」(14)ということによるものだった。父親も幹部学校から戻ってきていたので、作品の修正にアドヴァイスしてくれたという。その修正原稿を出すと、王小鷹は農場に戻ったが、その後も音沙汰のない状態が続く。

その半年後、王小鷹は上海へ戻り、機電設計院で働き始める。そこで老郭を訪ねると、老郭からは階級闘争の深まりにつれ、作品への要求が変わることを説明される。ここから浮かび上がるのは、『農場的春天』に収録された作品群は極めて政治的な意味合いが濃く、上海の政治状況を反映しているということだ。

王小鷹は老郭の説明を受け、原稿の破棄を提案する。しかし老郭はそれに反対し、その結果8回もの改稿のすえ、老郭は経験豊富な編集者の助力を得て、さらに改稿を行った。それでも老郭がなんとか審査に通るように努力し、作品発表にこぎつけたのである。

王小鷹はこの過程を「初稿を書いてから原稿発表に至るまで、まるまる2年かかった」(15)と述べている。ここで気になるのは、『農場的春天』の奥付にある出版時期が1974年7月ということだ。黄山茶林場で1969年に起こった、11名が犠牲になった事故から5年後に原稿依頼を受けたと述べられていることから、王小鷹は1974年に老郭に会い、原稿の依頼を受けたことになる。その後、まるまる2年かけて原稿を完成したというのだから、『農場的春天』の出版時期は1976

年ということになる。奥付の出版年が必ずしも実際に出版された年ではないことは、中国の出版物の場合ままあることなので、このずれに関してはなんら不思議なことはない。しかし王小鷹が上海に戻ったのが1974年であり、1974年の春節の帰省が王小鷹にとっての最後の“探親”であった。もしこのときに原稿の手直しをしたとすれば、老郭と王小鷹は少なくとも1973年までに顔を合わせていたと考えることが順当である。王小鷹「処女作」全体に10年の年号のずれもあり、老郭との出会いおよび原稿依頼の時期に対する記述の時間的ずれが意図的に行われたのか、単なるミスなのかは分からないが、この点には王小鷹の記述に齟齬が生じている。

とにもかくにも王小鷹は上述した過程を経て、作家デビューを果たしたのである。共著の金稼仿については、初稿段階の改編を担当したこと以外は触れられていない。おそらく王小鷹が苦労した8回以上にわたる改稿には携わってはいなかったと思われる。この点から、「小牛」発表にいたる道は、王小鷹と編集者である老郭の努力によると言える。

さらに当時の上海では、文藝政策においても「四人組」の意図が働いていたことは知られている(16)。そのなかでも「四人組集団の宣伝誌」であったのが、上海人民出版社から刊行されていた《朝霞》叢刊と雑誌『朝霞』(17)である。『農場的春天』を含む知青文学が同じ上海人民出版社から出版されたのは、「四人組」の文藝政策と無縁ではなかろう。しかし「生活の息吹」にこだわった老郭が強引に「小牛」を審査に通したことは、老郭自身の編集者としてのささやかな抵抗だったのではないだろうか。別の見方をすると、上海人民出版社だったからこそ、老郭のように強引に審査を通すということができたとも言えるだろう。

「小牛」の収録された『農場的春天』の出版後、『新苗集―評“上山下郷知識青年創作叢書”』（上海人民出版社、1976）に作品評が掲載された。『新苗集』には『大汗歌』（章徳益・龍彼徳、上海人民出版社、1975），『剣河浪』（汪雷、上海人民出版社、1974），『分界線』，「青春頌」（姚華、《朝霞》叢刊『青春頌』上海人民出版社、1974）などの知青文学への評論が掲載されている。そのなかには『農場的春天』に関する評論が12本掲載されている。その書き手の多くが黄山茶林場の人だというのに、「小牛」への言及はわずかに2本に止まる。ここから「小牛」があまり注目された作品ではなかったということが分かる。

しかし『農場的春天』のほかの作家たちと異なり、王小鷹はその後『洪雁』（上海人民出版社、1975）を発表することができたのである。王小鷹は『洪雁』の出版背景については、『可憐無数山』のなかでは述べていない。おそらく王小鷹がすでに上海に戻っており、原稿の依頼および修正がしやすい状況にあったことが作品発表の機会につながったと思われる。また『農場的春天』の出版背景にのなかで多くの知青が原稿を書いており、そのなかから時宜にかなった作品を修正・発表していたことが紹介されていたように、王小鷹のほかにも同様の原稿の依頼を受け、それらの作品のなかから最終的に王小鷹の『洪雁』が出版されることになったのではないだろうか。

4．王小鷹と『洪雁』

王小鷹は1975年に“少年児童文藝読物”と銘打たれた『洪雁』を、上海人民出版社から出版している。王小鷹『金泉女與水溪妹』（上海文藝出版社、1983）に掲載された杜宣「序」では、「小鷹は新聞雑誌によく文章を発表していただけではなく、すでに児童文学の中篇『洪雁』も出版していた」[18]として、文革終息前後の王小鷹の活躍を紹介している。

『洪雁』は児童向けに書かれたということもあり、冒頭部から擬音をリズミカルに挟み込み、音楽のように文章が書かれている。また語りかけるように「当初の洪雁はどのようだったのかな」[19]と疑問を投げかけたあとに、洪雁がどのようにして険峰茶林場にやってきたのかを語り出すなど、児童向け作品としての工夫を凝らしている。しかしその一方で、文革終息以前までの文章の手法と同じく、スローガンをゴシック体で強調する手法を取り、極めて政治的な言説も用いられている。主人公の少女洪雁は正義感にあふれ、周囲の知青からも慕われる班長で、何ものをも恐れない。その姿は特に「三突出」の求める英雄像を思わせる。

作品の舞台になったのは青龍山の青龍生産連のなかの険峰茶林場である。雑誌『朝霞』の創刊号に「努力反映文化大革命的闘争生活〔努めて文化大革命の闘争生活を反映する〕」[20]との表題で原稿募集の案内がなされているように、「闘争生活」を反映させるために、作家自身の経験に基づく作品を創作することはごく自然なことでもある。そのため、作品舞台は王小鷹が働いていた黄山茶林場を思わせる設定となっている。

『洪雁』は険峰茶林場にやってきてまだ10ヶ月に満たない知青たちが、指導員でもあり（険峰茶林）場党委書記の廖有棟から第三世界の兄弟国家を支援するために3万トンもの特級茶を生産するという任務を任され、その任務に挑むプロセスが描かれている。そこには茶葉の生産に詳しく、経験豊富な老馮（場革命委員会副主任）がいた。しかし彼はまだ若く経験も浅い知青たちを信じきれないでおり、ことあるごとに3万トンもの生産という任務を引き上げさせようとする。洪雁は老馮が自分たち知青を信じてくれないということに心を痛め、どうすれば老馮が自分たちを信頼してくれるのか考えていた。

実際、知青たちは茶葉の扱いに通じておらず、茶葉を悪くしてしまった。そのことに老馮は怒り、茶葉を変色させない方法を教えるどころか、彼らの任務を止めさせようとした。そのとき洪雁は自分たちの非を認めると同時に、「毛主席がわたしたち知識青年を三大革命の荒波に耐える鍛錬に上山下郷させたというのに、あなたのそのようなやり方は正しいのかしら」[21]として意見するのであった。

倉庫保管員兼会計の佟世貴は洪雁たちに不利な情報を老馮に告げるなど、何がしか陰で企んでいるようで、洪雁は彼の行動に疑念を抱いていた。一方、佟世貴のほうも、何にでも口を出し、正論を唱える洪雁を苦手としていた。佟世貴は故意に小侯に肩入れしたり、老馮の前ではしっかり労働をするなど、茶林場のなかでは上手く立ちまわっていた。しかし洪雁の目には仕

事に不真面目な人物と映っていた。佟世貴はそんな洪雁の目が怖かったのである。

『洪雁』の物語の前半部は、知青のなかの2つの班———小侯率いる“金猴班”と洪雁の率いる女子班“鴻雁班”の男女グループのライバル心のなかから、小侯の対抗心を洪雁がいかにほぐしてゆくのかということと、老馮の信頼をどのように勝ち取ってゆくのかということがメインに語られている。後半は前半部で暗躍していた佟世貴が実は龍尾坡の地主の息子である袁瞎子と手を組んでおり、国民党政権下においては青龍山が佟世貴のものであるという書付をもとに、青龍山を我が物にしようとしていたことが判明し、洪雁たちが佟世貴を追い詰めてゆくという階級敵の存在とその闘争がメインとなっている。

佟世貴の企みは、知青たちの任務を失敗させることに始まる。茶葉の育成用に購入された化学肥料を泉に捨てることや、老馮を怒らせることになった茶の幼木の摘み取りなど、さまざまな策を凝らす。その共犯者は袁瞎子ではあるが、実際にあれこれと企んでいたのは佟世貴であった。老馮とも打ち解け、小侯たちとも理解し合うことができた洪雁たちは猛スピードで茶葉を摘んでは、茶葉を痛めないようにするために迅速に運び下ろし、葉が熱を帯びて変色をしないよう、保管場所でも川の水をかけるという念の入れようであった。

すでに佟世貴の動向に疑いの目を向けていた知青たちは、小侯と仲のよい火柱が見張りの役割を果たすということで、彼に佟世貴とともに茶葉の保管場所で水をかけるという仕事をさせた。ところが火柱が川に水を汲みに行っているその隙に、佟世貴はストーブで沸かしたお湯を茶葉にかけ、葉を蒸らしてしまうのである。そのことに火柱が気づかないうちに、工場に運ぶ牛車に蒸らした葉を乗せ、さらにその上に青々とした葉を乗せることで、目くらましにするだけではなく、茶葉全体を蒸らそうと企むのであった。その企みが明るみにならないよう、あれこれ言い訳をつけて、佟世貴は小雲の乗る牛車に乗り込む。

牛車で茶葉が運ばれて行く様子を横目にしながら、洪雁が茶葉を山から運んできた。そのとき洪雁は茶葉を冷やすために広げていたところを見て、茶葉がわずかに変色していることに気付くのだった。そこで洪雁は牛車を追いかけてゆくのだが、牛車に人間の走る速度で追いつくわけはない。洪雁もこのままでは追いつけないとみるや、つづら折りになった山道を行くのではなく、一気に山を駆け下りることにするのである。

牛車の姿を確認すると、洪雁は小雲に声をかける。それに気付いた小雲が牛車を止めようとしたのだが、佟世貴は無理やり手綱を奪って牛車を進めようとした。しかし結局、洪雁に阻止されてしまい、変色した茶葉は工場に下ろされることなく、山に戻されるのだった。

この追跡劇で、洪雁は裸足で牛車を追いかけたばかりか、草木の生える道なき道を、果ては岩をも越えて、牛車に追いつくのだから、まさに「超人」としか言いようがない。そもそも佟世貴の見張りをしていたはずの火柱が責任を感じて、牛車を追いかけようとしたのだが、それを固辞して洪雁が追いかけた。男女の体力差を考えれば、火柱が追いかけるほうが妥当ではないかと思われるが、ここではそうはいかないのである。また洪雁が牛車に追いつけるのかどう

かということを、読者にやきもきさせるように、牛車に乗った二人に竹林奶奶（龍尾坡大隊の老貧農で遵国烈士の遺族）が声をかける場面を挿入し、牛車の歩みを止めさせるといった工夫も行っている。

上述の企みが露見したことで佟世貴は「自白書」を書かされることになるのだが、その見張りの目をかいくぐって、彼はその場から姿をくらましてしまう。その日は雨であったにも関わらず、洪雁たちは茶摘みをしていた。佟が逃げたと知ると、彼女たちも佟の捜索のために龍頭峰を上へ上へと登ってゆく。ここで初めて、この追跡が佟世貴に対しての「階級闘争」として位置づけられる。龍頭峰では竹林奶奶たち龍尾坡の貧下中農も合流し、佟世貴を追い詰めてゆく。その過程で、洪雁が山のなかの空洞を偶然見つけるのであった。そこには彼の悪事のあらゆる証拠———化学肥料、茶の幼木の摘み取りに用いた籠、そして錆びてもう使えなくなった銃と弾薬、さらには国民党が中国共産党から大陸を取り戻した暁には、青龍山一帯の50里の土地の権利が佟世貴にあるということを書いた書付が見つかるのだ。

佟世貴は作品の前半部では仕事の手を抜き、袁瞎子とこそこそと何事か企んではいるようだが、地主階級の袁とは異なり、階級敵と言えるほどの「敵」としては描かれていない。しかし徐々にその化けの皮が剥がれて行き、袁瞎子よりも「陰険な」階級敵として描かれる。追い詰められた佟は最も憎むべき相手である洪雁を殺そうとまでするのである。

もともとここの地域は袁黒麻子と呼ばれた袁瞎子の父親が地主として君臨していた。そこに佟世貴の父親佟彪が国民党軍の大隊長として青龍山区にやってきたのである。彼はもとは長江沿いで悪事を重ねてきた匪賊であったため、青龍山にやって来てすぐさま地主と結びついた。そして解放を迎えるのだが、そのとき佟世貴はたまたま上海の大学にて学んでいたため、難を逃れたのだった。佟の母親は台湾に逃れて行ったが、佟世貴はそのまま革命に参加した。袁黒麻子は外孫でもある佟世貴の身を案じ、また自分の後継者として銃弾と書付を残したのであった。袁瞎子は父親の言いつけ通りに、佟世貴を探したものの見つからず、佟が偶然にも険峰茶林場に派遣されたことで、袁と結びつくことになった。そして佟世貴は外祖父の意志を継いで、なんとか青龍山を取り返そうと企んでいたのである。

『洪雁』では「小牛」に比べると「階級敵」という存在が明らかになっており、しかも階級敵が反撃の機会を狙っているという設定になっている。これは明らかに四人組が“復辟回潮”とし周恩来の現実路線を批判した運動などを思い起こさせる(22)。前述したように『洪雁』は上海人民出版社から出版されており、四人組の政治的影響力のもとにあった作品と言え、文革後期の政治状況を色濃く反映している。

洪雁は何をやるにも迷いなく、みなをリードしてゆく。老馮の信頼を得るにはどうしたらよいのか、対抗心むき出しだが単純な小侯に協力と理解を得るにはどうしたらよいのか、常に沈着冷静に考える。また変色した茶葉を回収するため牛車を追いかけたり、佟世貴を山に追い詰めたり、「自ら」積極的に行動を起こす。相手が間違っていると思えば、毛主席の思想をもと

にそれを正す。まさに洪雁は「三突出」の典型的な英雄人物で、元紅衛兵であることから、18歳で連長に抜擢されるラスト・シーンまで完璧な人物として描かれる。こういった面から洪雁は人間味あふれる人物とはおよそ言えない。

一方、佟世貴に持ち上げられて気をよくしたり、洪雁に対抗意識を燃やしても上手くいかない小侯や知青をなかなか信じきれない老馮などは人間味を感じられるものの、やはり人間描写の掘り下げには欠けると言える。

また知青が茶林場にやってきたことが歓迎されたばかりか、彼らが2ヵ月をかけて龍頭峰から龍尾坡までの道を牛車が通れる道幅に拡張したことが中下農民から絶賛されるなど、老馮を除いた農民たちと知青の関係は極めて良好で、あくまでも非現実的な、絵に描いたような理想像が展開してゆく。現在の視点から見ると絵空事のような作品世界であり、やはりプロパガンダ作品であるといった側面が拭えない。

しかし一方では作品全体に細かいディテールを配置することで、読者に徐々に佟世貴の悪だくみを明らかにしてゆくという工夫も凝らされている。例えば、冒頭部では竹林奶奶のところから竹籠を受け取った洪雁が帰途につくという始まり方をする。この場面では後半2回の追跡劇を思わせるように、洪雁が靴をはかずに駆けてゆく様子を挿入している。また彼女の正義感あふれる性格をも描いている。洪雁は途中にある青龍泉で化学肥料の入っていたビニール袋を拾う。化学肥料の保管をしていたのは佟世貴で、洪雁は彼の仕事の不真面目さに憤る。

また別の場面では小侯が夜道を急ぐ佟世貴をたまたま見つけ、普段からよくしてくれる佟世貴と一緒に行動しようとした。佟世貴は小侯を振り切るために、彼に田圃でカエルを捕ることをそそのかす。単純な彼は佟世貴に乗せられてカエル捕りをしてしまうのだが、植えたばかりの苗を佟世貴が踏みつけてしまっていたことから、竹林奶奶に咎められてしまう。さらには洪雁にまで注意をされ、小侯はプライドをいたく傷つけられてしまうのだった。そして主犯格とも言える佟世貴は、実はこのとき袁瞎子との打ち合わせに行こうとしていたため、小侯だけではなく洪雁たちに見つかることを恐れていたということが分かるのだ。

このように最終的に佟世貴の企みの全てが明らかになるように、随所に彼の怪しい行動やヒントを配置し、最終的に「陰険な階級敵」として佟世貴の正体が明らかになる。『洪雁』がプロパガンダ作品であるということは否定できないが、作家としての王小鷹の力量が本作では窺えるとも言えるだろう。

5．知識青年・王小鷹

王小鷹の文革期における作家活動は決して華々しいものではない。処女作「小牛」と『洪雁』のほぼ二作に集約できるとも言えるが、文革期の新聞・雑誌に発表した文章についてはまだ不明な点が多い。

文革終息後から1980年代までに発表された王小鷹の単行本は以下の6種類になる。

『黄山十一小英雄』（陸堅と共著）少年児童出版社、1978.6

『金泉女與水溪妹』上海文藝出版社、1983.3

『相思鳥』百花文藝出版社、1983.10

『新嫁娘的鏡子』中国青年出版社、1986.5

『一路風塵』重慶出版社、1987.4

『你為誰辯護』作家出版社、1988.10

これらの作品のなかには「知青文学」も含まれているが、文革期の作風とは一転し、ファンタジックな印象を受ける。例えば、『相思鳥』所収の「月色溶溶夜」では上海に戻って来た知青の一組の恋人が知青時代の仲間の家を訪れようとしたが道に迷い、その界隈の人々に助けられ、また仲間の知青が慕われている様を見て、物質的な豊かさが真の幸せではないと気付くという筋立てである。

主人公の珊珊は上海では“上只角”に暮らしている。“上只角”は上海のアッパークラスを表す。彼女は上山下郷から戻ると、すぐさま農村での暮らしを忘れ、知青時代に世話になった依萍を田舎者として馬鹿にする。それどころか家や持ち物を値踏みするという有様だ。恋人の肖聡と結婚するにしても、彼の家に暮らすのは気に入らない。広い家を手配してくれるおじに会おうかというその日に、肖聡から依萍の新居に行こうと誘われたときには全く気乗りしなかった。しかし肖聡に依萍には姉のように世話になったということ、仲間の知青たちも来るということを言われ、渋々依萍の新居へ行くことに応じるのだった。

ところが引越しを手伝ったはずの肖聡だったが、どうやっても依萍の新居にたどり着けない。しかし道を尋ねては迷いを繰り返しているうちに、再び最初に道を尋ねた家族のうちの母親に会い、そこで依萍が“新娘子医生〔新婦の医者〕”と呼ばれて慕われている様子を知る。そしてようやく依萍の家にたどり着いたとき、珊珊は家よりも大事なものに気付き、肖聡と結婚して彼の家で暮らすことを決めるのであった。

作品そのものは短編作品で、大きなドラマがあるというわけではない。下町のなかを薄暗くなるなか道に迷い、もうあきらめて帰宅しようとすると肖聡の見覚えのある風景に出くわしたり、道を訊いたおばさんに再会したりといろいろなことが起こる。結局のところは、依萍の新居に辿りついたのだが、辿りつくまでのプロセスは不可思議な雰囲気を感じさせる。二人は似たような街並みをぐるぐると歩きまわり、キツネにつままれたような様子である。しかし迷路のような下町でも恐ろしさはなく、むしろ暖かい雰囲気が感じられる描写となっている。

もちろん文革期の作品とは異なり、プロパガンダ的な側面はなく、豊かな暮らしのなかで忘れがちな「幸せ」———物質的豊かさに幸せがあるということではなく、人と人のつながりのなかにこそある幸せを、声に大にして叫ぶのではなく不思議な体験のなかから気付かせている。

文革期の「小牛」や『洪雁』といった知青文学と、文革終息以降の創作が異なるのは当たり前ではあるが、王小鷹の作風は後者が本来のものと言える。文革中に作家デビューを果たした王小鷹ではあるが、では彼女がどのようにして黄山茶林場に行き知識青年になったのか、彼女の出身家庭はどのようなものか、ということについて以下に見てゆく。

王小鷹は1947年1月に江蘇省射陽河畔にて生まれた。父親は詩人蘆芒（本名、李衍華）であり、五姉妹の長女である。母親は王庄霄で、文革前までは上海市長寧区区委員会副書記をしていた。その後、上海市司法局副局長を務めている。現在は「上海市老年画会」会長・理事・常務理事にその名が挙がっている[23]。五姉妹とも母親の王姓を継ぎ、小鷹・小鳳・小鷗・小花・小燕と四女を除いて鳥の名を持つ。

王小鷹はもともと越劇の役者になりたいと思っていた。これは両親の反対によって実現しなかった。高校を卒業するときに、海外留学の選抜対象者になった[24]というから、成績優秀であったということが窺える。選抜試験の成績もよかったのだが、最後の政治審査という段階で落とされてしまった。それは外祖父がわずか24畝（約160ａ）の土地を人に貸していたことが原因であった。外祖父は読書人たるもの畑を耕すのは面子がすたると考えており、王小鷹はこれらのことを素直に書いたことで、不合格になったのである[25]。

文革が始まったころは、“紅五類”であったため、王小鷹は1966年9月にクラスの代表4名のうちの1名として北京に派遣され、毛沢東の第三回の接見（9月15日）に参加している。王小鷹「我愛北京天安門」（『可憐無数山』所収）では、彼女は背が低く、しかも近眼でもあったため、毛沢東の姿をはっきりとは見られなかったと述べている。しかし見えなかったとは言えず、毛主席の姿をはっきりと目にし感激したというふりをしていたという[26]。

翌日には北京大学・清華大学と回り、1日中『大字報』を写し、その日の夜には上海行きの列車に乗ったのである。「夭折的“長征”」（『可憐無数山』所収）の冒頭にも、当時の興奮が紹介されている。毛主席の姿は見られずとも、みなと一緒に「万歳」と叫び、その興奮をみなに伝えたいと上海に慌てて戻った。この体験は王小鷹の文革体験のある種のピークと言えよう。1967年秋、王小鷹の両親が相次いで“走資派”となり、“牛棚〔牛小屋：文革中、批判対象者が軟禁された場所の呼称〕”へ送られたのである。それにより王小鷹姉妹は“紅五類”から“黒七類”に変わってしまった。そのことが原因で王小鷹は「革命」に嫌気がさし、学校も離れ、友人に誘われるまま数名の友人とともに上海市青年宮学生課余文工団が発起した井岡山への長征をする宣伝小分隊に入るのである。

そこでは王小鷹は群舞のなかの一人にすぎなかった。彼女たちグループは長征組曲のなかの曲や語録歌，対口詞，快板などを練習し、井岡山への“長征”を敢行した。そして蘇州・無錫の鉄道線路に沿って徒歩で出発したのである。途中、毛沢東思想の宣伝をするために、演目を演じていた。このように進んでは止まり、止まっては進みを繰り返すため、その歩みは極めて遅かった。また紅衛兵たちが批判大会を開いていることもあり、王小鷹は自分の「出身」がば

れやしないかと心中穏やかではなかった。結局、無錫に2日間逗留している間に家のことが心配になり、電話をかけてしまう。すると祖母から母親が造反派に捕まったと教えられ、王小鷹はその日の夜に上海行きの列車に飛び乗って帰ってしまうのだった。わずか1週間の王小鷹の“長征”はこのようにして幕を閉じたのだ(27)。

さて王小鷹の両親が“走資派”とされた原因はどこにあるのだろうか。父親の蘆芒は詩人でもあるが、中国共産党員でもあり、1938年には抗日救亡運動に参加し、新四軍にも参加した人物である。しかし彼が入党するときの紹介人が叛徒となったことや彼が入党の紹介人になった人物が叛徒となったために、蘆芒もまた批判対象となったという(28)。文革は開始直後から批判対象が徐々に広がっていったが、蘆芒の場合もそのような批判対象の拡大の余波を受ける形になったと言える。また多くの作家が文革中批判の対象となっており、蘆芒もまた被害者としてその名が挙がる一人となっている。

一方、母親の王庄霄は上述したように父親がわずかな土地を貸していたために、地主階級の扱いを受けることになる。彼女は1919年生まれで、浙江省の嵊州の人である。1936年秋、杭州蚕桑学校に学んでいたが、ほどなくして西安事変が起こり、学生デモに参加して停戦要求や積極的に抗日を行うことを叫んだ。そのことが原因で国民党省政府のブラックリストに載り、学校から除籍されてしまう。地下組織の迅速な手配により、王庄霄は難を逃れられたのだが、荷物も何も持たないまま嵊州の実家に戻ることになった。彼女は抗日救亡協会の指導のもと地下党の組織した抗日組織に参加し、抗日救国の演目に多数出演する。

国民党軍第十六師団の師団長が王庄霄たちの演目にいたく感動し、十六師団の政治宣伝隊として活動するように希望してきた。浙江省地下党は12名の隊員を国民党に送り込むことに決め、王庄霄もその一人となった。ほどなくして十六師団は蒋介石の命令を受け、移動を開始する。ソ連から戻って来たばかりの蒋介石に宣伝隊隊員は若気の至りで自分たちの身分を明かしてしまう。これにより上層部がこの宣伝隊を前線に送って日本軍の手で始末させようと目論だ。しかしこの目論見は上手くいかないばかりか、国民党軍自体が潰走することになる。潰走する国民党に紛れ、王庄霄たちは逃げ、その後新四軍に参加する。1939年には、正式に中国共産党員になっている(29)。

王小鷹の母親場合、父親が地主でもあり、地下党の指示ではあったのだが国民党第十六師団にその身を置いたこともあったため、文革期に批判対象となり得る条件を持っていたと言える。そのため文革の批判対象が広がってゆくなかで、彼女も批判対象となったのである。

“上山下郷”運動が始まると、王小鷹はすぐに安徽省黄山茶林場に応募する。それは中学を卒業したばかりのすぐ下の妹小鳳を上海に残そうと考えたからだ。しかしその妹も姉に上海に残ってもらおうと、黒龍江建設兵団へ応募した。その際血書をしたためたのだが、出身家庭が“走資派”とされていたために、彼女の希望は受理されなかった(30)。当時、黒龍江は“辺防重地〔国境守備重点地〕”であったため、黒龍江省へ“上山下郷”できたのは“紅五類”といっ

た「出身がよい」という人間に限られていた。一方、王小鷹が応募した安徽省黄山茶林場はもともと労働改造用の農場だったものを知青用に改めたものであったため、黒龍江へ行くような厳格な政治審査がなかった(31)。そこで1968年に、王小鷹は黄山茶林場へ行くことになり、妹は上海の紡績工場で紡績台を受け持つ労働者となったのである。

このころ王小鷹の両親はともに五七幹部学校に労働改造に行っており、家のなかは全てのものが差し押さえられていた。「揮手自茲去」（『可憐無数山』pp.78,79）によると、両親が不在のため、学校から出してもらった“上山下郷”の証明書を持ち、役所と交渉しなければならず、交渉しても、かろうじてボロボロのトランク1つを持ち出せただけであった。出発時には両親も五七幹部学校から戻ってきたが、自分たち“走資派”とされた人間が見送りに行くことで娘に影響を及ぼしてはいけないと、王小鷹の両親は家で彼女を見送ったのである。

ここで上海市から“上山下郷”に参加した人数を見てみると、1968年から1975年上半期にかけて、就業者1,730,856人のうち947,024人が“上山下郷”に参加している(32)。王小鷹が黄山茶林場へ行った1968年のデータでは、274,228人の対象者のうち90,664人が“上山下郷”に参加し、上海市所属の農林場には56,241人が行っており、上海市以外の土地の農林場には1969年以降（1969年は31,848人）に配属が始まっている。1968年から1975年上半期にかけて、安徽省には144,123人が行き、農林場には131人（安徽省内訳のわずか0.1％）となっている。安徽省そのものには全体の24％が行ってはいるものの、農林場へ行った人数の少なさを感じる。同表で掲載されている黒龍江省のデータと見比べると、黒龍江省には全部で164,344人が行き、農林場には66,259人（全体の40.3％）もの人間が行っているのである。

すぐ下の妹は上海外国語学院附中の66届初中畢業生〔1966年中学卒業生〕と分かっているが、王小鷹の高校卒業年がはっきりしていない。「可憐無数山」（『可憐無数山』p.8）によると、どうやら66届高中畢業生〔1966年高校卒業生〕と考えてよいようではある。「1966届高中畢業生各区、県分配状況総匯」(33)では、1966年の高校卒業生が31,309（内女性、13,436）人に対して、“上山下郷”したのは18,407人であり、黄山茶林場500人が行っている。安徽省の農林場のデータにはこの人数が加味されていないのは、農墾局所属国営農場であることによる。また「1966届初中畢業生各区、県分配状況総匯」(34)では、中学卒業生の場合は黄山茶場500人、黄山林場300人としている。

一方、「1967届高中畢業生各区、県分配状況総匯」(35)には、総計106,222（内女性、47,491）人に対し、“上山下郷”したのは22,410（内女性、11,204）人とされるが、その「分配表」には黄山茶林場の記載がない。

王小鷹は黄山茶林場四連、通称“采雲場”で生活していた。「小牛」のなかに出てくる“雲嶺茶場采雲山突撃排”はまさにこの通称から名づけられたものである。そして彼らの生活していた峰々に、王小鷹夫妻は名前を付けて呼んでいた。そのなかに“采雲山”があるのだ。王小鷹によると、黄山茶林場は当時9万畝以上もあったが、知青たちが引き上げると4千畝ほどにま

で激減してしまっている[36]。

王小鷹「花開花落自有時」(『可憐無数山』所収)には、当時流行していた書物が挙げられている。そこには楊沫『青春之歌』(1958),曲波『林海雪原』(1957),柳青『創業史』(1960),馮徳英『苦菜花』(1958)のほか、N.オストロフスキー『鋼鉄はいかにして鍛えられたか』(1932,33),E.ヴァイニッチ『馬あぶ(The Gadfly)』(1897)などのソ連やアイルランド(イギリスで出版)の文学を読んだことが挙げられている。さらに子供のころにみた紹興戯のなかの、林黛玉と祝英台の恋愛悲劇への憧れが捨てきれず、父親の書棚から『王実甫戯曲集』,『湯曲祖戯曲集』,『関漢卿戯曲集』などをこっそりと読んだことが述べられている。このような読書から当時推奨されていた作品だけではなく、古典的素養を育てる読書経歴があったことが分かる。

王小鷹の家族は小鳳が黒龍江省に行けなかったように、両親の影響が影を落としていた。それは「父親的微笑」(『可憐無数山』所収)に紹介される三女小鷗のエピソードにも見られる。生まれたときから人形のようにかわいかったと母親が言う小鷗は、7歳の時に父親にピアノを買い与えられる。王小鷹の家の向かいには翻訳家の傅東華がおり、彼の娘が上海音楽学院に通っていたことから、彼女に小鷗は師事することになる。1972年に小鷗は上海音楽学院附属中学を卒業したのだが、上海音楽学院への進学は夢にすら思える状況ではなかった。どこかの文藝団体の募集ですら合格の望みがなかったのである。

その一方で、両親の影響が別の形で働くこともあったのだ。それは解放軍総政文工団が上海に募集にやってきたことに始まる。小鷗は無理だと思いながらも、この募集に応募してみたのである。このときの募集の責任者が年かさの軍人で、両親が元新四軍の戦士であると知ると、走資派であろうとなかろうと構わないと、小鷗を採用することに決めたのである。これは良くも悪くも両親の影響であった。そして小鷗の解放軍総政文工団入りは、文革期に周囲から白眼視されてきた王小鷹一家とっては、文革中にあった数少ない朗報であったのである。

1973年の春節は、王小鷹にとっては格別で、四女である妹小花は全椒で生産隊に入ってはいたものの、下の妹は紡績工場,三女は解放軍総政文工団,末の妹はまだ中学生と、みなが集まれる機会だった。実際、「父親的微笑」には王小鷹にとって文革中の春節が決して楽しいものではなく、父親が隔離室に隔離されて家に戻れないことも、帰宅できなかった母を訪ねて崇明五七幹部学校に行ったこともあり、大変な状況であったことが述べられている。しかし1973年は小鷗が軍人となったことで、居民委員会小組から「光栄人家」[37]という紙が送られ、家の入口に貼られることを許された。両親が批判されてからは、王小鷹の家には『大字報』が貼られ、匿名電話で罵られ、脅迫状まで送られてきていた[38]。その状況とは全く正反対の楽しいと感じられる春節を、文革中初めて王小鷹は味わうことができたのである。

王小鷹は黄山茶林場で働いて6年後の1974年に、上海に戻って来ることができた。しかし王小鷹と入れ違いで、末の妹小燕が南匯農場へ行くことになった[39]。その3年後に大学入試が復

活したので、復習用資料を作成し、妹に勉強をさせた。その結果、妹は上海戯劇学院に入学できたのである。王小鷹は母親のように10歳年の離れた妹の試験に付き添ったという(40)。王小鷹は長女であるということから、妹たちに対しては責任感を感じており、末の妹小燕が大学に入ったことで、家族に対してようやく肩の荷を下ろすことができたのである。

さて王小鷹が1974年に上海へ戻って来られたのは、機電設計院で働くことになったからである。出身がよくないと、都市部での就職が通常難しい。しかし王小鷹は幸運にも戻って来ることができたのだった。

上海市機電設計院では設計の仕事をしていた。またこのころ知青仲間であった夫王毅捷と結婚している。彼の父親もまた五七幹部学校の“牛棚”で隔離審査を受けていた。結婚後は夫の両親の家である五原路にあるマンションに引っ越し、王小鷹は家を出た。農場から上海に戻った当初、夫は伝染病院で炊事を担当していたが、その後衛生局辨公室にて接客処理を行っていた。

1977年に大学入試が再開されると、王小鷹夫妻はすぐさま応募する。王小鷹のほうは華東師範大学中文系に合格している。この際、設計院の仕事を捨てることについて、多くの人が反対したという(41)。しかしそれでも10年前に打ち壊された大学進学の夢を、王小鷹は取ったのである。彼女は1966年に北京大学歴史系の志願書を書いていた。この当時はまだ文革が始まってはいなかったものの、すでに自主的に新疆建設兵団に参加することが称揚されていた。王小鷹も65年末に新疆建設兵団の新団員になれることが決まっていたため、大学進学と建設兵団との間で進路について苦悩していた。しかしこのとき文化大革命が発令され、大学入試の暫時取り止めが発表されるのである。その結果、王小鷹の大学進学の夢は断たれたのだった。

1977年、彼女の夫王毅捷もこのとき大学に合格し、二人は1978年9月から大学に通うことになった。大学受験再開時には王小鷹と末の妹、夫とその末の弟の4名が受験をしたのだが、誰一人欠けることなく合格した。この進学が王小鷹夫妻にとっては、さまざまな意味を持つことになる。大学2年のときに王小鷹は妊娠するが、1年休学するという選択肢は取らずに、子供をあきらめることになる。

王小鷹の夫王毅捷は優秀な人物で、大学を1年半で終えると、大学院へ進む。1年ほどしてからアメリカに留学し、わずか1年半で修士号を取得した。しかし二人の進学により、王小鷹が42歳になるまで子供を授かる機会を持てなくなってしまうのである。しかしそれほどまでに「大学進学」の持つ意味が大きかったのだ。

文革開始わずか1年で両親がともに“走資派”とされた王小鷹は文革中に様々な苦労を味わうことになった。しかしそれでも、姉妹5人とも何とかやってきた。作家デビューも果たし、念願だった大学進学の夢も果たせた。しかし1979年、父親蘆芒が脳溢血により急逝する。その死はあまりにも突然で、王小鷹たち家族にとっても青天の霹靂であった。杜宣「序」（『金泉女與水溪妹』）に、父親蘆芒が自分への原稿依頼かと思ったところ、娘王小鷹への原稿依頼であり、編集者が自分に目もくれなかったというエピソードが述べられているが、ここから蘆芒が娘が

自分と同じ執筆業を選んだことへの喜びが感じられる。文革は王小鷹一家にとっては、さまざまな苦労をもたらしたが、しかし作家王小鷹を生み出す契機になったことには違いないのだ。

6．おわりに

王小鷹が処女作「小牛」を発表する経緯を通して見ると、当時の知青文学の発表状況がよく分かる。それは張抗抗のように自ら積極的に原稿を投稿したものだけではなく、編集者たちが農場を回り集めた作品があったということである。『農場的春天』を出版した上海人民出版社では、そのなかでも農墾局所属国営農場を回って作品を集めたことが、知青の所属農場によって分かる。つまり回りやすい上海近郊の農場で、手っ取り早く原稿を集めようとしていたことが見てとれる。

これは『朝霞』の原稿募集にも「上海地区および上海所属の機関の作者を主とする」（『朝霞』1974年第１期、p.80）と記されるように、編集者が直接指導できる範囲内で原稿を募集している。また王小鷹に原稿を依頼した編集者の態度から、知青であれば作者は誰でもよく、発表に耐え得る水準の作品が書けさえすればよかったということが分かる。その上書き手の出身階級には一切こだわっていないことも窺える。もし出身階級にこだわるのであれば、黒龍江の農場で原稿募集をしたほうが、労農兵家庭の出身者に当たる確率が高いはずだ。しかも王小鷹の言うように黄山茶林場に“上山下郷”するのは政治審査が甘かったということは、黄山茶林場に来ていた知青は王小鷹のように両親が“走資派”とされるなどの出身階級がよくない者が多かったと思われる。さらに文章がうまいということが推薦基準になっていたように、まずは出身階級ではなく、まずは文章レヴェルであったのである。

こうして王小鷹は「小牛」を発表するに至るのだが、その道は平たんではなく、何度も審査に落ちていた。また8回に亘る改稿でも審査に合格せず、ヴェテランの編集者の手を借りて改稿を行ったのち、担当編集者であった老郭が強引に審査に通したという経緯で、発表に至った。そのプロセスに2年かかったというのだから、政治状況に応じた作品創作の難しさを感じる。

しかし続く『洪雁』の創作については、王小鷹は言及をしていない。これは張抗抗が『分界線』の創作にあたって、このようなプロパガンダ作品を世に出したことは当時の政策に加担したものであり、いわば自分も加害者の立場にあったこと、それと同時にこのような創作を強要された被害者でもあったという二重の意味合いで自分を苦しめることになったことを告白している[42]ように、王小鷹にとっても極めてプロパガンダ色の濃い『洪雁』は触れたくない作品になっているのであろう。

王小鷹が「わたしからすると、小さなころから共産主義の崇高な理想的な教育と雷鋒式の人民に尽くす人間の規範（教育）を受けてきたが、“文革”がわたしたち作られたばかりの世界を打ち壊し、苦痛と困惑のなかで長らく苦しんだ」[43]と告白するように、これまで受けてきた

教育や文革という特異な時代に苦しんだ様子が分かる。それゆえにそのなかで作家デビューすることになった王小鷹には、『洪雁』という四人組の文藝政策に加担することになるプロパガンダ作品について言及することができなかったのだろう。その後、王小鷹は佛教に傾倒し、精神的には共産主義イデオロギー教育のもとで醸成された思想からは離れてゆく。それほどまでに文革が王小鷹に残した「傷跡」が大きかったとも言えよう。

祖丁遠「路在有志者的脚下———記著名女」（『広州文藝』2001年第11期）には、『金泉女與水溪妹』の原稿料が夫王毅捷のアメリカ留学のエアチケット代になったことや、夫の帰国後も編集者として夫にアメリカ留学のときに出会ったさまざまなことを作品にするよう勧めたことが書かれており、夫を支えている様子が描かれている。また1985年春に、雑誌『萌芽』の編集者を辞め、上海作家協会の専業作家になったあと、2年ほど法律事務所で弁護士をしていたことにも触れられている。それは作家としての限界を感じ始めていた王小鷹の悩みに気付いた、上海市司法局副局長も務めたことのある母親が王小鷹を法律事務所に紹介したことによる。ひょっとすると王小鷹の母親は、娘が作家という職業についていた場合、ふたたび文革のような政治動乱になったときに夫蘆芒のように批判対象になることを心配していたのかもしれない。しかし2年の法律事務所の経験をもとに、王小鷹は創作を再開した。

このように文革期の文藝政策のもと、知青であり文章さえ上手ければ誰でもよいというなかで、王小鷹は文壇デビューを果たす。文革中、両親が相次いで“走資派”とされ、王小鷹はさまざまな苦労を味わうことになった。王小鷹自身も文革のもたらしたものに苦しめられることにはなるのだが、文革後期の四人組による文藝政策があったからこそ、王小鷹は作家になれたとも言える。王小鷹は「無可奈何花落去」（『可憐無数山』所収）で、もし越劇の役者になっていたら、もし海外に留学していたら、もし妹が黒龍江建設兵団に参加し自分が上海に残って労働者になっていたとしたら、と人生の転機で違う人生を送っていたらと疑問を提示している。しかし「運命の力」(44)によって、文学の道に導かれたというのだ。それも「いかんともしがたく花が落ちてゆく」(45)という方式で、作家の道に入りこんだのである。王小鷹は現在はこのような運命の神様に感謝し、作家という職業が好きだという。そして彼女の経験したさまざまな出来事があったからこそ、作品が書けるというのである。「人生はいつも苦しく上手くいかないことでいっぱいだが、優雅さや楽しみにも満ちている。この二方向の要素がなければ、小説は書けない。わたしはそう信じている」(46)のである。このようにして王小鷹は運命に導かれて、文革期に作家となったのである。

〔注〕

（1）王小鷹の父親は蘆芒という詩人。本名は李衍華。

『中国作家協会会員辞典』（中国作家協会会員辞典編輯室編、作家出版社、2009）によると、上海人で、1920年生まれ、1979年に逝去した。中国共産党員でもある。大学を卒業しており、

1938年抗日救亡運動に参加した。新四軍皖南軍部政治部服務団員、同組長、華中局江淮日報社編輯、新四軍三師政治部文藝股長兼魯藝工作団教員などを経て、『上海文学』,『収穫』,『萌芽』といった雑誌の編集委員をした。1941年から作品を発表し始め、59年に中国作家協会に加入した。詩集に『東海之歌』,『朝霞従東方昇起』などがある。上海作協党組書記処書記や副秘書長を務めたこともある。

また映画『鉄道遊撃隊』の挿入歌である「弾起我心愛的土琵琶」(作曲は呂其明)を何彬とともに作詞したことでも知られている。

(2)「可憐無数山」『可憐無数山』p.9、参照

(3) 王小鷹「処女作」では“1979年夏天”(『可憐無数山』p.177)と述べられているが、1969年7月5日に起こった事件であり。「処女作」の記述は作中の年号がすべて10年ずれていると思われるため、「処女作」で挙げられた年号はすべて10年引いて用いている。

(4) 原文は「很會寫東西的」(「処女作」『可憐無数山』p.178)。

(5)「処女作」(『可憐無数山』p.178)参照

(6) 原文は「會畫畫,還會寫古詩,聽人說,他寫過小說的」(「処女作」『可憐無数山』p.178)。

(7) 王小鷹は「其實,只是一篇記事的散文」(「処女作」『可憐無数山』p.179)と述べる。

(8) 王小鷹は「改得非常仔細,加上了人物,豐富了情節」(「処女作」『可憐無数山』p.179)と述べている。

(9) 原文は「有生活氣息,也有真情實感」((「処女作」『可憐無数山』p.180)。

(10) http://baike.baidu.com/view/2400683.htm(2011/11/11アクセス)。中国の百科事典サイトはどこもほぼ同様の情報をアップしている。また司法部司法鑑定科学技術研究所幹部でもある。

(11) 原文は「稿子我們還是要用的,只是要修改,你到編輯部來一下,我們一起商量商量」(「処女作」『可憐無数山』p.180)。

(12) 原文は「缺乏階級鬥爭的觀念」(「処女作」『可憐無数山』p.180)。

(13) 瀬邊啓子「文革期における張抗抗の創作活動」(『佛教大学　文学部論集』第95号、2011、p.32)

(14) 原文は「“階級敵人還不夠陰險”,“階級根源還沒有挖深挖透”」(「処女作」『可憐無数山』p.181)。

(15) 原文は「從寫初稿到稿子發表,歷時整整兩年」(「処女作」『可憐無数山』p.182)。

(16)『朝霞』叢書の出版や雑誌『朝霞』が「四人組集団の宣伝誌」と知られる。(22院校編写組『中国当代文学史』第3巻、福建人民出版社、1985 ／日本語版は坂田完治・溝口喜郎訳『文革期文学の概説　1966年～ 1976年の文学』九州大学大学院言語文化研究院、2001。岩佐昌暲『文革期の文学』花書院、2004、参照)

(17) 雑誌『朝霞』は1974年1月20日に刊行が始まり、76年9月20日まで計33冊が出版された。

(18) 原文は「(這我才知道)小鷹不僅在報刊上經常發表文章,還已出版了兒童文學中篇《洪雁》」(杜宣「序」『金泉女與水溪妹』p.3)。

(19) 原文は「當初的洪雁是怎麼樣的呢?」(『洪雁』p.12)。

(20)“征文啓事〔文章募集〕”として、「努力反映文化大革命的闘争生活」という文章が掲載された(『朝霞』1974年第1期、p.80)。

(21) 原文は「毛主席是讓我們知識青年上山下鄉經受三大革命風浪鍛鍊來的,你這樣做對嗎?」(『洪雁』p.18)。「三大革命」とは、階級闘争・生産闘争・科学実験の3つを指す。

(22) 王年一『大動乱的年代』河南人民出版社、1988、参照

(23)「上海市老年画会」HP(http://www.52921234.com/lnshh/p102.htm、2011/11/15アクセス)参照

(24)「無可奈何花落去」『可憐無数山』p.173、参照

(25)「無可奈何花落去」『可憐無数山』p.173、参照

(26)「我愛北京天安門」『可憐無数山』p.66、参照

(27)「夭折的“長征”」『可憐無数山』pp.71-76、参照

(28) 文革中の蘆芒への批判を詳述したものが見つからなかったため、やむなく「百度百科」(http://baike.baidu.com/view/483077.htm、2011/11/11アクセス)を参照した。

(29) 王庄霄の経歴については、王小鷹「投奔新四軍」(『解放日報』2011.8.1、15面)、走走のブログ「永遠的老兵」のなかの王庄霄を訪問したときの経歴（2005.8.12、上海、http://blog.sina.com.cn/s/blog_49660813010004p9.html、2011/11/15アクセス）を参照にした。
(30)「揮手自茲去」(『可憐無数山』p.78)、「無可奈何花落去」(『可憐無数山』p.173）参照
(31)「無可奈何花落去」『可憐無数山』p.174、参照
(32) 金大陸『非常與正常―――上海“文革”時期的社会生活』上（上海辞書出版社、2011）所収の「附録六―七、1968年―1975年（上半年）知識青年安排状況」に挙げられたデータに拠る。
(33)「附録六―四、1966届高中畢業生各区、県分配状況総匯」(『非常與正常―――上海“文革”時期的社会生活』上、前掲注)
(34)「附録六―三、1966届初中畢業生各区、県分配状況総匯」(『非常與正常―――上海“文革”時期的社会生活』上、前掲注)
(35)「附録六―五、1967届高中畢業生各区、県分配状況総匯」(『非常與正常―――上海“文革”時期的社会生活』上、前掲注)
(36)「可憐無数山」『可憐無数山』p.5、参照
(37) 直訳すると「光栄な家」、つまり軍属の家を表している。
(38)「夭折的“長征”」『可憐無数山』p.70、参照
(39)「当大姐的甘苦」『可憐無数山』p.169、参照
(40)「当大姐的甘苦」『可憐無数山』p.170、参照
(41)「無可奈何花落去」『可憐無数山』p.174、参照
(42) 張抗抗「《分界線》」『誰敢問問自己』時代文藝出版社、2007、参照
(43) 原文は「以我來說，從小接受的是共產主義崇高理想的教育和雷鋒式的人民服務的做人準則；“文革”將我們剛剛形成的世界觀打破了，在痛苦和困惑中煎熬了許久」(「故事在構思之中」『可憐無数山』p.216)。訳文の（　）内は引用者による。
(44) 王小鷹は“命運之神力〔運命の神の力〕”(「無可奈何花落去」『可憐無数山』p.175）と表記する。
(45) 原文は「“無可奈何花落去！”」(「無可奈何花落去」『可憐無数山』p.175)。
(46) 原文は「我相信，人生總是充滿艱苦坎坷，也充滿韻味和樂趣的，沒有這兩方面的因素，小說是寫不出來的」(「無可奈何花落去」『可憐無数山』p.176)。

（せべ　けいこ　中国学科）

2011年11月15日受理